

敗戦後の70年、日本は日米同盟を基軸に比較的堅実な外交を展開してきたが、周辺国との領土問題や歴史問題、拉致問題など、難易度の高い外交はお手上げになる。記者時代に日本外交を取材しながら、外務省の「外交偏差値」は低いと思っただ。

欠点の一つは、外交交渉のモメンタム(勢い)をしぼしば見逃してしまっただ。

たとえば、北方領土は旧ソ連の占領後70年を経ても一島も返ってこないが、これは、冷戦終結時のチャンスに日本側が動かなかったことが大きい。ソ連崩壊後、民主化したエリツィン政権は「スターリン外交の過ちを正す」とし、日本側に「歯舞・色丹の返還交渉、国後・択捉の帰属交渉」を同時に進める秘密提案を持ち掛けた。しかし、日本は4島返還ではないとして「優雅な無視」を決め込んだ。

同じ敗戦国の旧西ドイツはゴルバチョフ時代に積極

拓殖大海外事情研究所教授

名越 健郎



山陽時評

なごし・けんろう 1953年笠岡市生まれ。東京外国語大卒。時事通信社に入社し、バンコク、モスクワ、ワシントン支局、外信部長などを経て現職。国際教養大特任教授も務める。著書に「独裁者プーチン」(文春新書)など。

「偏差値」低い日本外交

直球プラス変化球を

的な首脳外交を展開し、ドイツ統一をソ連に認めさせるなど戦後処理を一気に完了してきた。

欠点の第2は、日本外交は

緩やかだ。事大主義の伝統が残る韓国に対しては、日本が仲良くしようとするに出たことが韓国を高飛車にさせたところがある。むしろ日本の強さを見せつける「剛速球」

日本外交には、巧みなレトリックの行使も時には必要になる。オバマ大統領の「核のない世界」、習近平国家主席の「新シルクロード」など、大国の首脳は実現性はともかく、レトリック外交を多用する。

了した。バブル経済に酔っていた日本は、冷戦終結の千載一遇のチャンスをいかせなかった。

その後、大国主義に転じたプーチン政権が「ロシアの4島領有は第2次大戦の結果」などと戦勝史観に転じたことは周知の通りだ。

冷戦終結時に米國務長官を務めたジェームズ・ベーカー氏が回想録で強調したように、「外交はタイミング

調整が進む日中首脳会談れば、カネをかけない外交カードとなる。

「直球」だけで「変化球」が少ないことだ。中国、ロシア、韓国、北朝鮮と並ぶしたたかな相手打線を直球だけで打ち取れるとは思えない。

ロシアに「4島の帰属問題を解決し、平和条約を結ぶ」と訴えるだけでは、解決しそ

うもない。ウクライナ問題でロシアは外交的に孤立し、経済も困難に直面しているだけに、ウクライナ危機を巧みに利用する「変化球」が必要だ

や、年末に検討されている

がすべて」なのだ。

日本拉致問題でも、北朝鮮は最近、再調査継続を通告し時間稼ぎに出たが、日本側が昨年春、1年の再調査期間を与えず、一気に攻勢をかけたければ、進展があったかもしれない。当時の北朝鮮は中国との関係悪化や外交的孤立で苦境にあり、日本に歩み寄ってきた。

プーチン大統領訪日など、今後安倍外交の真価が問われよう。過去の政権のように、外交を外務省に任せるとはなく、重要案件は政治主導の首脳外交が望ましい。

鮮は最近、再調査継続を通告し時間稼ぎに出たが、日本側が昨年春、1年の再調査期間を与えず、一気に攻勢をかけたければ、進展があったかもしれない。当時の北朝鮮は中国との関係悪化や外交的孤立で苦境にあり、日本に歩み寄ってきた。

緩やかだ。事大主義の伝統が残る韓国に対しては、日本が仲良くしようとするに出たことが韓国を高飛車にさせたところがある。むしろ日本の強さを見せつける「剛速球」

日本外交には、巧みなレトリックの行使も時には必要になる。オバマ大統領の「核のない世界」、習近平国家主席の「新シルクロード」など、大国の首脳は実現性はともかく、レトリック外交を多用する。